

アメリカ漫画『ブロンディ』へのまなざし

「夫の家事労働」をめぐる

岩本茂樹



▶はじめに

チック・ヤングによるアメリカの日常生活を描いた漫画『ブロンディ』が敗戦直後の1949年1月1日から1951年4月15日まで『朝日新聞』に連載された⁽¹⁾。わずか2年余りの連載であったにもかかわらず、この国境を越えた漫画が小説やテレビ・ドラマだけでなくネット上にも登場し、「憧れのアメリカン・ライフの象徴」として現代にまで語り継がれることになる⁽²⁾。このことは、いかに当時の人々の心を強く捉えた漫画であったのかを示すことになる。

筆者の『ブロンディ』研究の企図は、日本に登場した『ブロンディ』漫画から日常生活を営む敗戦直後の民衆がアメリカの生活文化のどのような面を知覚し、そして日常生活の実践の中でどのように咀嚼し、取り込んでいったのかにある。このような研究スタンスは、スペインによるインディオの植民地化の成功における両犠牲を指摘するミシェル・ド・セルトーに依拠するものである(Certeau, 1980=1989: 14-16)。要するに、インディオたちはスペインが押し付ける儀礼行為や法あるいは表象に従いつつも時にはすすんでそれを受け入れながら征服者がねらっていたものとは別のものを作りだしていたと論じるセルトーの議論を戦後日本の占領期に置き換え、日本独自の異文化受容を明らかにしようとするものである。本稿の目的は、これまでの研究スタンスを継続しながら、「夫の家事労働」に焦点を絞り、実際に描かれた『ブロンディ』内容と読み手の解釈のズレ(「発信」「受信」移動にともなう内容のズレ)と、掲載当時の人々と現代の学生が捉える『ブロンディ』像のズレ(「時間経過」から生じるズレ)に着目することによって、敗戦直後の日本の人々がアメリカの家庭生活における「夫の家事労働」をどのように知覚し、咀嚼したのかに迫ってみることにある⁽³⁾。



図1 『朝日新聞』
(1950. 12. 10付)

▶ 1 『ブロンディ』に描かれた「夫の家事労働」

『ブロンディ』の中で、「夫の家事労働」はどのように描かれているのであろうか。『朝日新聞』に掲載された漫画から見てみることにしよう。

1949年3月18日付では、長イス（ソファー）で寝ていたダグウッドは「ダグウッド あなたがオサラをふく番よ」とブロンディに呼びかけられ、クローゼットに逃げ込むシーンから始まる。しかし、そのような逃避はブロンディにはお見通しで、寝ている間にダグウッドにはヒモがつけられており、そのヒモをブロンディがたどりながらダグウッドの居場所をつきとめるのである。

妻ブロンディに飼いならされたかのような夫ダグウッドであるが、ブロンディの夫操縦法には巧みさがある。夫の面子を保持させたまま問題に終止符を打つことになる結果、夫ダグウッドは反感を抱くことなく皿洗いに向かうことになるのである。

続いて1949年1月11日付は次のようなストーリーである。ダグウッドが煙草を吸おうとしてパイプの掃除をしていると、ブロンディから「さら洗いとアイロンかけをしてほしい」と指示され、しぶしぶダグウッドは従うものの、皿を洗っているとポリポリ音がする。布巾として使っていたものは、ブロンディからアイロンをかけるよう手渡されたワイシャツであった（1949. 1. 11付）。

このように、ダグウッドの家事労働には熱が入っておらず、失敗がつきまとう。そのことを裏付けるのが、1949年8月18日付の漫画である。ダグウッドが皿洗い中に皿を割ってしまうところを見た娘クッキーから、「さあ他のものをこわさないうちに台所から出て行って下さいな」と交替を申し出られ、「ボクは生まれつき女向きに出来てないんだな」と呟く。この言葉に表現されるように、そもそも「皿洗い」をはじめとする家事労働は本来女性の仕事として捉えているところにその原因がある。

それゆえ、「夫の家事労働」はあくまで妻への「思い遣り」の域でしかない。そのため、ダグウッドはできるだけ家事の手伝いを避けようと戦術を練るのである。帰宅すると、「サムケがして熱があつてネ」、「骨が痛む」などとさまざまな症状を訴えながら家事労働に向けた妻の指示に対して防御網を張ろうとする（1949. 6. 3付）。「皿洗いの手伝いをしたいが、ひどくつかれているのさ！ ボクの小さい指一本持ち上げられないシマツさ」とブロンディに言い訳をしながら、長男アリグサンダーにけしかけられてクローゼットのパイプでケンスイをしまい装った仮病が妻にばれてしまう（図1）。また1949年1月7日付では、ブロンディの指示で服のしつけを手伝うために服を着せられるのだが、ブロンディが針箱を取りに2階に上がっている間に隣のウッドレイがトランプを誘うと電気スタンドに服を着せて逃げ出すのである。

『朝日新聞』に掲載された『ブロンディ』は734日に及ぶ。ストーリー内容ごとの頻度を数えあげてみると、「食事」が142で、「昼寝」を含む「睡眠」は141である。ただし、「妻から夫への指示」は155あり、「夫から妻への指示」の20をはるかに超えるのである。いかに、ブロンディがダグウッドを操縦していたのかを物語る数値である。さらに、「夫の家事労働」は60で、その内で最も多いのが「皿洗い」の21となる（岩本茂樹，2002：44-45）。

これらの数値に裏打ちされたストーリー内容の分析から、夫として穏やかな休息の場としての家庭を求めつつ現在の地位を保持したいのであれば、家庭で夫は妻の家事手伝いをしなければならないというチック・ヤングによる読者への警鐘が織り込まれた漫画と言えるのではないか。要するに、「奥さんがたの悩み」が爆発することは夫にとって最

も脅威であるゆえに、愛する妻のご機嫌を損なわぬ程度に夫は家事労働の協力を惜しまぬことが大事であるとの男性読者へのメッセージではないかということである。

▶ 2 現代の学生が捉えた「夫の家事労働」

筆者が1993年時に初めて『ブロンディ』を手にした時、夫ダグウッドが台所に立って皿洗いをする姿に自己の家庭を見るかのような衝撃を覚えた。それは、自己の姿が、すでに1950年前後のアメリカの家庭生活においてダグウッドとして描かれていたという驚きであった⁽⁴⁾。現代の若者たちが『ブロンディ』漫画に描かれた「夫の家事労働」をどのように知覚するのであろうかという疑問から、占領期に掲載された『ブロンディ』を何の事前の知識も与えずに学生たちに示すことにした。その狙いは、現代学生の『ブロンディ』へのまなざしを捉えることによって、現代日本の家庭生活の実態と現代における理想の家庭生活を浮き彫りにするだけでなく、戦後日本の家庭生活の歩みを逆に照射し、「夫の家事労働」に照準を合わせた文化受容をめぐる議論の方向性を示してくれると考えたからである。

2004年2月6日、国立大阪病院附属看護学校1回生73名を対象として『朝日新聞』に掲載された当時の漫画『ブロンディ』を提示し、実施したアンケート結果は、描かれた『ブロンディ』を鏡として現代日本の「夫の家事労働」を以下のように示すことになる⁽⁵⁾。

『ブロンディ』で描かれた家庭生活を68%もの学生が現代の日本の家庭生活に似た印象を抱いており、その指標としては「夫婦の位置関係」、「夫の家事労働」を挙げた。『ブロンディ』に描かれた夫婦の位置関係からブロンディが夫ダグウッドに家事の手伝いを指示する姿や、家事手伝いから逃げようとする夫の姿が現代日本の家庭では良く見られる光景として捉えているものの、「このような家庭を理想としますか」という問いには、56名の80%の学生が「理想」と答えた。このことから、家庭における夫婦の関係が同等であることが大勢を占めてきたとはいえ、今もなお女性が家事をすることを前提とする基盤が強固に存在していることを示すものである⁽⁶⁾。

このような現代日本における「夫の家事労働」の現状は、『ブロンディ』によって示されたアメリカにおける「夫の家事労働」が日本において浸透してこなかったことを物語る。

それでは、掲載時の日本の読者たちは『ブロンディ』に描かれた「夫の家事労働」のシーンをどのように捉えたのであろうか。次の章で見えていくことにする。

▶ 3 読者の「夫の家事労働」へのまなざし

3-1 研究者のまなざし

社会啓蒙を担う当時の知識人は「夫の家事労働」をどのように捉えていたのかを、掲載当時の研究書における『ブロンディ』漫画の記述から見てみることにする。

今村太平は、1953年に書いた「アメリカ漫画と日本漫画」において『ブロンディ』漫画から示されるものはアメリカ市民の生活が日本の我々が想像するほど決して豊かではなく、「賃金奴隷としてのあわれな俸給生活者の浮彫りであることはいうまでもない」(今村太平, 1992: 239)と切りすてる⁽⁷⁾。『ブロンディ』漫画が終始明朗な外観をもっている理由についても、次のように述べる。

「ブロンディ漫画の明朗感はブロンディとダグウッドが人間ではなく、一個の人形にすぎないことによるように思われる。人形はいかに精巧でも、みずから思考する能力をもたない。ブロンディもダグウッドもみずから考える能力をもたない点で人形である」(今村太平, 1992: 239)

『ブロンディ』は日本と同じアメリカ市民の賃金労働者の悲哀さを描いたものであり、資本主義による機械人形の姿を描いたものとの分析に終始し、アメリカの生活文化における家事労働や、夫婦関係の機微についての記述はない。矢内原伊作の「ブロンディ論」(矢内原伊作, 1950)においても、ブロンディとダグウッドはともに一本調子であり人間的な個性や意志や感情を失った機械人形で、機械文明の奴隷となった人間に対する風刺も反抗も見られないと分析する(矢内原伊作, 1950: 59)。矢内原も今村同様、家事労働の問題を捉える知覚枠組みではなく、分析軸は資本主義批判に絞られていた。社会心理学者である南博にしても、今村、矢内原に続いて「機械的人間」と述べつつアメリカの男女関係を否定的に触れるにすぎない。

「さてアメリカの女性にとって、容貌あるいは姿かたちがそんなに大切だとされるのは、いうまでもなく、未だにアメリカでは正しい意味の男女同権が行きわたっていない証拠である」(南博, 2001: 94)

南に示された男女関係の言説は民衆の生活状況から懸け離れた知識人の界から眺めたものであり、高い設定価値に依拠した意見でしかなく、生活実践としての「夫の家事労働」への知覚はない。このように、連載当時の研究者たちは社会を変革しなければならないとする視点からの知覚枠組みで『ブロンディ』を捉えており、家事労働は彼等の知覚枠組みの埒外であった。

3-2 一般読者のまなざし

では、掲載当時の一般読者はどのように捉えていたのだろうか。読者としての視点から著わされた一般書の中の記述を概観してみることにしよう。

獅子文六は『ブロンディ』が『朝日新聞』に連載された数カ月後に「ブロンディー家」と題した随筆を書いている。3,000字弱からなる文面中、日本の小サラリー・マン家庭とブロンディー家との間にある大きな差異として、家庭電化製品と家具などの生活状態について記述が472字記述されている。その中で家庭電化製品はわずか20字程度であり、それも個々の製品が列挙されているだけである。472字に及ぶ獅子によるブロンディー家への生活状態に対するまなざしの中心は、ダブル・ベッドにある。

「殊に、寝室のダブル・ベッドが素晴らしい。あんな広々とした、ダブルでありながら、夫婦各自の自由の睡眠と休息を許す設計のものは、まったく新式で、恐らく欧羅巴^{ヨーロッパ}の家庭には、まだ普及されていないものと考え。・・・略・・・そんなベッドが、アメリカでは安月給取りの家庭にあるらしいのである」(獅子文六, 1949: 26-27)

獅子にとって、日米の生活の大きな差異の象徴的指標はベッドなのである。

とは言え、「しかし、もっと大きな差を、私たちは、主婦であるブロンディの上に、発見しなければならない」との文で始まる獅子にとっての最大の関心は、約1,800字にも及ぶ夫婦関係にある。そこで、獅子の言及に立ち入ってみることにしよう。

「家庭の営みは、完全に婦唱夫随^{ひしやうふうずい}の形を採っているらしい。それは、一家のうちで、彼女が一番優秀な人物らしいからである。・・・略・・・アメリカでは一般的に、男より女の方が学問や芸術に対する教養が高いという話だが、ブロンディー家でも明らかにそういうところが見える。

・・・略・・・

一家の主権は、確かに彼女の手にあるようである。尤も、彼女は昔のアメリカ漫画の「マギイ」のようにパン^{こね}捏り棒を握って亭主を追いかけるようなことはしない。頭腦的、精神的に、亭主を征服しているらしい。注意すべきことは、あの漫画で、ブロンディの顔だけが、人間らしく^{えが}画かれて

ることである。

・・・略・・・

といて、ブロンディは、才女とも賢夫人とも思われない。彼女も、帽子やコートをしきりに欲しがるし、亭主が他の女と話したといては、ヤキモチを焼く。その点、甚だ尋常普通の女に画かれている。恐らく、ブロンディは、有り触れたアメリカの主婦の型なのであろう。(獅子文六、1949：27)

ブロンディが家族の中で主導権を握っているのは優秀な女性であることが指摘され、ブロンディを「機械人形」とする掲載時の研究者とはまったく反対に「人間的な顔」と看做す。また、衣服への欲望やヤキモチといった行為も女性の自然の姿と知覚し、知識人による機械人形といった知覚とは大きく異なる。

ダグウッドについては登場場面が多いところから実質上は亭主ダグウッドが主人公であるとして次のように述べる。

「彼が、時間一杯まで寝ていて、会社へ飛び出して行くことや、細君に被服代を要求されてペソを掻くことは、日本の若いサラリーマン諸君の共感を湧かすであろう。また、彼が友人とのトランプ遊び撞球に、細君の眼を掠めて出かける苦心も、多くの共鳴を博するであろう。しかし、食後の皿洗いや、地下室の掃除となってくると、次第に共鳴どころでなくなってくるかも知れない。

・・・略・・・

ブロンディが幸福な妻であり、主婦であることは確かだが、ダグウッドが世界の最も幸福な亭主であるか、という問題になってくると、日本の亭主の一人として、私も慎重な考慮を払わずにいられない。彼が細君からイヤな仕事を命令されて、しかも失敗を重ね、「亭主なんかになるもんじゃない！」と、ひそかに悲しい溜息を洩らす場面を見ると、私も亦、日本の亭主に生まれてよかったと、溜息を洩らさないでもないのである。(獅子文六、1949：27)

獅子には主婦が家庭で主権を握ることについて異義をさしはさむつもりはない。だからこそ、奥様の眼を盗んで遊びに走ろうとする姿にも、奥さんから衣服のお金を求められることに戦々恐々とする姿にも共鳴できることなのである。ただし、日本でも見られる女性らしさと合わせて夫以上に身についた教養の豊かさで家庭を切り盛りする主婦ブロンディで留まるならば、日米の大きな差をブロンディに見てとることはなかった。獅子には、当時の研究者とは異なり、しっかりと妻からの皿洗いや掃除の指示といった夫の家事労働が知覚されていたのである。夫の家事労働を象徴とするアメリカの家庭生活は獅子にとって危惧として映った。それに比べて、アメリカとは異なる日本の家庭に安堵をするのである。

同じく男性の視点から『ブロンディ』単行本第7集の末尾に、荒垣秀雄が「ブロンディ漫画の魅力」を寄せている。

「それで僕はフトこんなことを空想することがある。ダグウッド君をいつか一度日本に招待してドテラでも着せて「オーイ」と女房を顎でこき使って亭主関白を極めこませてみせようかな・・・だが、すぐに思い直して、余計なお節介はすまいと思う。そんなことをしたら『ブロンディ』は一ぺんで世界の人気を失墜してしまうだろう。あれが、廿世紀なかばにおける小市民の、平凡なる幸福の最大公約数なのだろうから・・・」(荒垣秀雄、1950)

荒垣は、日本の漫画の主人公に比べてブロンディ夫人の美しさに魅力を感じながら、日本の土俵に立った夫という位置から亭主関白としてのダグウッドを想像してみる。ところが、妻が家庭の勝利者になることは多くの人認める幸福への教えであるとして、亭主関白という日本の土俵にダグウッドを引きこむことを空想した自己を戒めるのである。裏を返せば、家庭生活での切り盛りを妻に託し、その範囲内に閉じ込めてある日本の慣習を是認しているということである。要するに、獅子、荒垣共に、めんどろな家庭

生活の運営は妻に主導権を渡すものの、その主導権でもって妻の領域内に夫が巻き込まれること、ましてや妻に指示されることなど許せないのである。そこには、日本の夫族による迫りくる「夫の家事労働」がセットされたアメリカの夫婦関係をなんとしても撥ね除け、日本の夫婦関係を保持しようとする意図が読み取れる。

アメリカ生活も経験している坂西志保は、『ブロンディ』に描かれた百万長者のように見える暮らしだけが幸福ではないとして次のように説く。

「私たちが楽しく、意味ある生活をするためには、物質的に恵まれた、豊かな環境も重大ではあるが、同時に現在のような場合にも、お互いに人間的な理解と同情とがあれば、もう少し生活は楽になるだろうと思う」(坂西志保, 1948: 47)

あくまでもアメリカの家族関係にある互いの人間的な理解を学ぼうとすることが指摘されているだけで、具体的に夫の家事労働への参加を促すものではなかった。

1949年4月12日付『朝日新聞』の天声人語では、次のように『ブロンディ』を評している。

「一家の責任者は亭主ではあるが、家庭の主権者はむしろ主婦である。どちらかといえば、夫の方から男女同権をさげびたいくらい。家庭における主婦の地位と権威はたいしたものである。・・・略・・・どこにでもころがっている小市民の家庭だが、冷蔵庫もあるし、その中にはいつでも食料が入っている。台所は電化されているし、主婦の悩みは皿洗いだけだ。家計の苦勞という場面は一度も出てこない」(『朝日新聞』1949. 4. 12付)

電化された生活状態にも触れながら、やはり夫婦関係と家事労働に眼が注がれている。主婦にとっての悩みとして皿洗いが記述されているものの、ダグウッドの皿洗いの手伝いには触れられていない。家事労働は主婦との前提のもとに、台所が電化されたとしても主婦が皿洗いすることが言外に示されている。要するに、一般書における「夫の家事労働」の記述は、脅威として捉えた日本の亭主族のみであり、その反応も防衛意識でしかなかった。

3-3 戦後を振り返る中で

戦後を振り返る中での『ブロンディ』の記述において「夫の家事労働」に言及したものがあろうか。

敗戦直後の生活を振り返って語る女性読者にしても、1日に2, 3回も水が途絶え、チョロチョロとしか流れない心細い水道と、配給の生木の薪で煙だらけであった現実を前に、毎朝目に飛び込む『ブロンディ』の暮らしは、読むたびにため息をつかせた、と次のように述べる。

「亭主のダグウッドが家庭のなかで小さくなってオドオドしているのに、ブロンディの若々しく活動的なこと、それも手を汚さないで掃除や洗濯のできる電化生活と何か関係があるように思っていました」(天野正子・桜井厚, 1992: 137)

ブロンディの生き生きとした活動は家庭電化製品にあると解釈していたわけで、アメリカの家庭生活における民主的な関係から活動的な主婦を探ろうとする視点はなかった。

戦後を振り返っての『ブロンディ』の記述は、文化人類学者の石毛直道が、『ブロンディ』の漫画における冷蔵庫(そのなかにはいつも食料がつまっており、分厚いサンドイッチがすぐにつくれる)、洗濯機、テレビ、自動車などに象徴される暮らしが「アメリカ的生活様式への憧れ」を創る大きな要因であった(石毛直道, 1987: 40)、と述べるように家庭電化製品に象徴される「豊かなアメリカ」への憧れに満ちている。映画評論家の

佐藤忠男（朝日新聞社編，1971：133）も石毛と同様の意見を述べ，山本明にいたっては『ブロンディ』をとりあげ，大きな電気冷蔵庫，電気掃除機，電気洗濯機，自動給湯機つきの風呂などの家事合理化が進んでいるアメリカの生活を知り「半ばあきらめ気分で，アメリカを夢みた」（山本明，1986：110-1），と語る。それゆえ，振り返って語る読者には家庭生活の明るさにしても家庭電化による合理化であって，「夫の家事労働」はおろか夫婦間の機微や綾を捉える知覚はなかった⁸⁾。

▶ 4 日本における「夫の家事労働」をめぐる文化受容

4-1 世代による「夫の家事労働」の知覚のズレ

「夫の家事労働」における現代日本の姿は，掲載時における読者の異なる知覚と解釈を越え，日本の亭主族である獅子たちが危惧していたアメリカの生活文化に織り込まれた「夫の家事労働」を受け容れなかったことを示すものである。そこで，次に読者の異なる知覚と解釈の整理をしてみることにする。

掲載時において，研究者は資本主義批判に終始し，アメリカの家庭生活における家事労働は知覚されていなかった。しかし，獅子文六を代表として一般読者の亭主族には「夫の家事労働」というアメリカの生活文化の受容はせき止めたいという思いがあったにせよ，知覚されていた。それが，振り返った読者には，家庭電化製品に満たされた「豊かなアメリカ生活」という『ブロンディ』像に結晶化され，他の描写は霧消と化したのである。

これまでの『ブロンディ』に対する語りや分析をした人物の誕生時と主な歴史的事象，さらに『ブロンディ』に触れた時期をまとめてみると表1になる。掲載時において研究書で著わした分析者と一般書で著わした読者，そして振り返って語る読者によって異なる『ブロンディ』像がこの表の二重線で区切った領域とぴったり重なる⁹⁾。言説に表れた表象面における『ブロンディ』への知覚認識のズレはこのジェネレーション・ギャップ

表1 「ブロンディ」掲載時と読者の年齢

西暦 誕生	1933年 国連脱退	1937年 日中戦争	1941年 太平洋戦争	1944年 学童疎開	1945年 敗戦	1947年 2.1スト中止	1949年 ブロンディ掲載
石毛直道 1937年生		誕生	4歳	7歳	8歳	10歳	12歳
山本明 (小田実) 1932年生	1歳	5歳	9歳	12歳	13歳	15歳	17歳
佐藤忠男 1930年生	3歳	7歳	11歳	14歳	15歳	17歳	19歳
矢内原伊作 1918年生	15歳	19歳	23歳	26歳	27歳	29歳	31歳
南博 1914年生	19歳	23歳	27歳	30歳	31歳	33歳	35歳
今村太平 1911年生	22歳	26歳	30歳	33歳	34歳	36歳	38歳
荒垣秀雄 1903年生	30歳	34歳	38歳	41歳	42歳	44歳	46歳
坂西志保 1896年生	37歳	41歳	45歳	48歳	49歳	51歳	53歳
獅子文六 1893年生	40歳	44歳	48歳	51歳	52歳	54歳	56歳

を示す二重線に合致する。ただし、この表はあくまでも受容者側の知覚のズレを描いただけであり、「夫の家事労働」という異文化受容を明らかにするには受容者側の深層部にある意識をあぶりだす必要がある。

そこで、脅威を抱いた獅子たちと知識人は当時の言論空間で共存していたわけであるが、次の日本を背負う世代である「振り返って語る読者」は『ブロンディ』から「夫の家事労働」への語りがないにせよ、「夫の家事労働」そのものをどのように捉えていたのか見てみることにしよう。そのことは、表1に示された上部の二重線の断絶、すなわちアメリカの生活文化に織り込まれた「夫の家事労働」を受容していく体制が整えられなかったことを明らかにする鍵になるのではないか。

そこで、振り返った読者と同世代の人物から男女の関係、「男性の家事労働」へのまなざしに着目することにする。「何でも見てやろう」との思いを抱き、フルブライト留学生として1958年にアメリカへ渡った小田実^{フルブライト}は1932年生まれである。小田がもし『ブロンディ』を読んでいたとするなら、山本明と同じ17歳の頃となるゆえに、小田のアメリカへのイメージはこの世代のアメリカのイメージを代表するものと言えよう。

「アメリカ、またアメリカ人の持つタフさ、底抜けの明るさ、人のよさ、ときにはやりきれなくなる彼等の「善意」、途方もない底力、要するに例の「開拓者魂」とやらいうもの 私にとって、アメリカとは何よりも先ずそうしたものであった。」(小田実、1969:8)

小田の語りには当時の人々が学び知ったアメリカのイメージが示される。さらに小田はアメリカの女の子と仲よくなる方法を書いている。小田に言わせれば、英語がペラペラでダンスを軽くこなし自動車の運転ができて女性にかしづくことがうまくなければいけないと考えるのはとんでもない謬見であると言うのである。ダンスができることや自動車の運転ができることは並の男を示す事であって、できないことがかえって値うちをあげ、話も一言二言重い口調でしゃべる方が女性を引きつけることになるという。女性に対する礼儀作法に関しても次のように述べるのである。

「私は男性横暴のありがたき国日本国においても、その点で有名な男であった。(私のように何もしなければ、女性のためにドアを開けることから皿を洗うことまでしてやる国では、それだけで変わっていることになる。・・・略・・・あるとき、ある女性が、日本国では男性は恋人あるいは奥さんと呼ぶとき、いかなる呼びかけをつかうのであるか、と訪ねたことがあった。そのとき私は、彼女提供のマルティニの飲みすぎで頭がクルクルまわっていた矢先だったから、考えるのもめんどくさく、そいつは「oi」というのであると答えた。そのとき日本の女性たちは何と応じるのか、彼女はつづけて訪ねた。それは「hai」である。私は調子にのって言った。答えのほうは、アメリカ人は友人などに呼びかけるのに「ハーイ」というから、しごく覚えやすいのであった。当時、私はその女生と恋のマネゴトらしいものをしていたから、早速、実地に用いることにした。私は彼女のアパートに行き、「オイ、コーヒー」とどなれば、彼女は「ハーイ」と答え、コーヒーを持ってくれる。これはニューヨークでは大いに気持ちよいことであった。)(小田、1969:31-32)

1965年にベトナム反対市民運動の「ベ平連(ベトナムに平和を! 市民連合)」を展開する小田にしてこのような男女関係の意識を持っていた。彼には表層においても内実においても対等な関係を描いておらず、「皿洗いの手伝いなどもっての他」と語る小田からは、その10年前に「皿洗い」に言及する獅子と何ら変わりはない。それも、獅子たちが憂えた日本での「夫の家事労働」受容は脅威にさらされることなく、小田による「男性の皿洗い」を拒否する姿勢に伺えるようになら問題もなく撥ねつけられたということである。掲載時において児童・生徒であった世代には「家事労働」は女性であるということが自明のこととされ、引き継がれていた⁽¹⁰⁾。その点は、逆にマルクス主義に影響を受けた知識人

にしても生活レベルでは獅子たちと同様で、次世代に対して夫の家庭における家事負担を指し示す事はなかった。また、当時の教科書『中学生の社会1 学校と家庭』（安部能成編、1953）においても、家庭電化製品の充実が主婦の家事労働軽減を示すだけであり「夫の家事労働」の記述はない⁽¹⁾。このことは、「夫の家事労働」は掲載当時の日本ではどの世代においても、またどの社会的位置からも同意を得られることがなかったことを裏付ける。

それにしても、民主的な夫婦関係として「夫の家事労働」の現実化の主体となるべき女性は、「夫の家事労働」が織り込まれた『ブロンディ』に対して、なぜにアピールすることがなかったのであろうか。掲載時において直接「夫の家事労働」に遭遇する主婦たちの対応に迫ることでこの問題を明らかにしたい。

4-2 占領期における主婦の「夫の家事労働」へのまなざし

占領期の雑誌記事のなかに、アメリカの家庭生活の実際をウィリアム夫人から直接聴くことによって、日本の家庭生活に生かそうとする内容で掲載された村上志久子による「アメリカの家政と日本の家政 ウィリアム夫人・氏家壽子の対談拝聴記」がある。そこには、家事労働についての対談を通して当時の女性がいかにアメリカの家事労働を捉えていたかが表われている。

「その働く主婦の一日のスケジュールこそお伺いしたいものでございます」

“第一私は、お掃除は、一週間の内何日ときめて、毎日、そんなに、おおがかりの掃除はいたしませんでした。（椅子の生活は、じかに座る生活より、この点簡単に行く点があるのではないかしらと私は思いました）ちよっちよっと、整頓をしておく程度で、お洗濯も週末にしなければなりませんでした。然し、その間でもお友達を招んだり招ばれたり（ママ）、充分楽しく暮せました。”

・・・略・・・

“日本では、奥さんが、御主人の身のまわりの事に、追われる場合が沢山ございますが、あちらでは？”

“男も女も、家事は平等に働きますの。例えば、朝、私がベッドを作っていれば主人はコーヒーをわかし、朝食の用意をするという具合に”

私達三人は、顔見合せて、うなっていました。そこで、私は先日夫人のお宅で見せて頂いた日本紹介の写真帳を卓の上にさがし出し、その一頁、新婚旅行の巻を氏家、古川両先生の前にさし出しました。そこには新夫が新婦の帯を手伝って結んで挙げている写真がのっていました。それは、これからのあるべき夫婦の姿として、明るいほほえましいものでした。」（村上志久子、1949. 7. 15：30-31）

アメリカ家庭の曜日を決めた掃除の仕方に対しても、「椅子の生活と畳の生活」の違いとして捉えており、受け容れようとする姿勢は見えない。圧巻なのは、ウィリアム夫人が「男も女も、家事は平等に働きますの」と夫婦による家事労働の実態を具体的に述べた時の反応である。顔を見合わせてうなる姿は、まったく異なる世界の文化に触れた驚きでしかなかった。そして、すぐに話題を転じ新婦の帯を結ぶのを手伝う夫の姿を今後のあるべき夫婦の像として表現される様は、「夫の家事労働」というアメリカの生活文化には明確な一線を引こうとする対処の仕方を示すものである。この異文化接触の現場から見えることは、彼女たちには「夫の家事労働」はスルーさせたただけであって、受け容れていこうとする積極的姿勢は微塵もなかったのである。

▶ おわりに

本稿は、『ブロンディ』に織り込まれた内容から「夫の家事労働」に焦点を合わせ、「夫の家事労働」という異文化に接触した折に生じる受信者の感情を含む反応と解釈過程

に着目することによって戦後日本のアメリカ生活文化受容の様を捉えることを狙いとしましたものである。『ブロンディ』掲載時において「夫の家事労働」に対する言及は、当時亭主族であった一般読者だけでしかなく、その内容も日本の中に定着するのではないかという危機意識からのものであり、「夫の家事労働」という生活文化侵入を防衛しようとするものでしかなかった。社会の変革を求めた資本主義に挑むスタンスに立つ知識人においては、生活実践における女性の家事労働解放への視点はなく、『ブロンディ』に描かれた夫の家事手伝いについての記述はなかった。敗戦直後の日本においては、アメリカの妻が主導権を持った家庭運営には共感を示せたとしても、あくまでも家事労働は妻に委ねられたものであって夫に及ぶものではないという固定された社会意識に根強く縛られていた。そのため「夫の家事労働」を推進する原動力となるべき女性においても、直接その方向性が目の前に提示されようとも受け入れがたいものとして撥ねつけるだけでしかなかった。

このような状況下の子供たちにとっては「男性の家事労働」が啓発されることもなく、アメリカへの憧れとして家庭電化製品への羨望が醸成されるだけであった。要するに、「皿洗い」に象徴される「夫の家事労働」はスルーするだけで、日本の生活に根づく女性の家事労働を自明のごとく引き継いでいたのである。

アメリカの生活様式を表象する漫画『ブロンディ』をめぐる文化受容、それもトランス・ナショナルな移動に照準を合わせた議論から導き出されたことは、国境を越えた文化移動には両犠牲が孕んでいるということである。すなわち、資本主義による消費文化に導かれたグローバル化の側面と、そのグローバル化によって逆に自国のローカル性を喚起させる側面があるということである。それゆえ、『ブロンディ』漫画から家庭電化製品購入への道は開かれたものの、獅子たち亭主族が危惧した「夫の家事労働」は次世代の小田たちにも咀嚼されることなく、皿洗いに見向きもしない日本のあるべき男性像として維持されたのである。さらに、受容する側に視点を置いて述べれば、支配者の表象する生活文化が受容されるには、被支配者の人々を引き付け、主体的に受け入れようとする意志が醸成される必要があるということである。言い換えるならば、民衆の同意というヘゲモニーを獲得しないかぎり、国境を越えた異文化受容はないということである。その結果、日本における「夫の家事労働」は、『ブロンディ』で示された夫による「家事手伝い」という「思い遣り」の水準にいたるのにさえ、60年の歳月を費やすに至ったのである。

注

- (1) ただし、『週刊朝日』では1946（昭和21）年6月から、新聞連載が幕を閉じたあとの1956（昭和31）年まで連載されていた。なお、アメリカの占領下の中で、『週刊朝日』の連載を含め、これまで謎とされてきた『ブロンディ』の『朝日新聞』連載開始と、マッカーサーと共に紙上から姿を消したことについては、『憧れのブロンディ』（岩本茂樹，2007）において当時の占領下の言論統制と絡めて議論し、仮説を引き出している。
- (2) TBSテレビは2000年8月28日から3夜連続で『百年の物語』を放映しており、第2夜「愛は悲しみをこえて」で『ブロンディ』が登場する。小説では『ジャック アンド ベティ』（今野勉・堀川とんこう，1992）で採り挙げられている。詳しくは『憧れのブロンディ』（岩本茂樹，2007）参照。
- (3) 「夫の家事労働」の文化受容については、『憧れのブロンディ』[岩本茂樹，2007]でも採りあげてはいるが、議論しつくされたものではなかった。それゆえ、本稿ではこの領域にのみ焦点を定め、現実世界の中でどのように個人々に内面化されていったのかという水準まで掘りおこすことによって、「夫の家事労働」に関する文化受容議論を深めることを狙いとする。
- (4) 夫の皿洗いをする姿への筆者の注目、自己のバイアスがかかった知覚を意味するものでもある。
- (5) 看護学校の学生は多くが高卒の現役生であるものの、大学卒、社会人も含む73名であり、その内女性が68名であった。回答者は学校の特性上、働くことを前提に通っている学生であり、明確な職業意識を持っている。また、多くが女性であることから、アンケート結果にはバイアスがあることは免れない。

- (6) この結果は、当時の読者にはなかったジェンダーの視点がそなわっており、今もなお女性が家事をすることを前提にして考えている現代の夫の現状に異義を示すものである。また、現代の若者たちが抱く民主的家庭観を裏付けるものと考えられる。
- (7) 「アメリカ漫画と日本漫画」は、1953年に思想の科学機関誌『芽』に収集された論文。本稿では、1992年に岩波書店から発行された『漫画映画論』より引用するため、表示は（今村太平、1992）とする。
- (8) 敗戦直後の科学技術を真理とする言語空間のヘゲモニーについてはこれまでの筆者のブロンディ研究を参照（岩本茂樹 2002, 2007）。
- (9) このジェネレーション・ギャップと『ブロンディ』への知覚のズレから仮説の域ではあるが次のような推測が可能となり、新たな研究課題を導くことになる。獅子、坂西、荒垣は明治生まれであり青春を大正デモクラシーの中で過ごしているゆえに、『ブロンディ』の夫婦関係に眼が注がれてはいた。しかし、生活に根強く刻まれた男性中心主義を打ち崩すまでに至るものでなかったのではないか。
なお、『ブロンディ』掲載時の分析者である今村、南、矢内原らは1910年代の生まれであり、青春を軍国主義によって覆われながらも一方で知識人はマルクス主義に強く影響されていたことが『ブロンディ』を機械人形と知覚することに至ったこと、振り返った読者は敗戦を中学生時に体験し占領期に構成されたアメリカのイメージというフィルターを通してアメリカ文化を捉えていた。この点については『憧れのブロンディ』（岩本茂樹、2007）を参照のこと。
- (10) そのことを物語るように、1958年から1960年にかけて日本のM町をフィールド調査したボーゲルは、サラリーマンの家庭においても夫の家事手伝いは非常に少ないことを報告している。
- (11) イデオロギー装置としての役割を果たす学校教育が次世代に異文化受容の構えを形成していたとわけで、注(8)で示した拙著（岩本茂樹 2002, 2007）の議論を参照。

参考文献

- 朝日新聞社（編）（1971年）日本とアメリカ 朝日新聞社
- 阿倍能成（編）（1953年）中学生の社会 1 学校と家庭 日本書籍
- 天野正子・桜井厚（1992年）「モノと女」の戦後史 有信堂
- 荒垣秀雄（1950年）ブロンディ漫画の魅力 ブロンディ, 7
- De Certeau, Michel（1980）*L'Invention du quotidien, 1, Arts de faire*, U.G.E., coll. 10/18,（山田登世子訳（1987年）日常実践のポイエティック 国文社）
- Gramsci, Antonio, *Quanderni del carcere*.（山崎攻（監修）代久二・藤沢道郎（編）（1961年）グラムシ選集 1～6 合同出版）
- 今村太平（1992年）漫画映画論 同時代ライブラリー 岩波書店（（1953年）アメリカ漫画と日本漫画 芽思想の科学機関誌）
- 石毛直道（1987年）衣と食と住と 祖父江孝男（編）日本人はどう変わったのか 戦後から現代へ NHKブックス
- 岩本茂樹（2002年）戦後アメリカニゼーションの原風景 『ブロンディ』と投影されたアメリカ像 ハーベスト社
- 今野勉・堀川とんこう（1992年）ジャック・アンド・ベティ物語 いつもアメリカがあった 開隆堂出版
- 南博（2001年）アメリカそして中国 [南博セレクション 1] 勤草書房（（1950年）ブロンディの悲劇 アメリカ型『テスト』のクーモア 日本評論 日本評論社）
- 村上志久子（1949年）アメリカの家政と日本の家政 ウィリアム夫人・氏家壽子の対談拝聴記 家庭科学, 130, 7, 29-31（ブランゲ文庫）
- 小田実（1969年）何でもみてやろう 河出書房新社
- 坂西志保（1948年）アメリカの暮しと日本の暮し 暮しの手帖, 5
- 獅子文六（1949年）ブロンディ一家 ホーム, 5（ブランゲ文庫）
- Vogel, Ezra F（1963）*Japan's New Middle Class: the salary man and his family in a Tokyo suburb*, University of California Press.（佐々木徹郎 監訳（1968年）日本の新中間階級 サラリーマンとその家族 誠信書房）
- 山本明（1986年）戦後風俗史 大阪書籍
- 矢内原伊作（1950年）ブロンディ論 現代人の笑いについて 木村徳三（編）人間 5, 4
- * ブランゲ文庫については、占領期雑誌記事情報データベース化プロジェクト委員会（代表・山本武利）作成の「占領期雑誌記事情報データベース」（<http://www.prangedb.jp/>）から収集

（岩本茂樹 関西学院大学社会学部非常勤講師）